



陰
に
日
向
に



りん

「それは心から？」

それがあなたの口癖だった。

真昼のひかりがあなたの頬を照らして、産毛が金色にひかっている。私はそれを見ている。細かなそれを。次第にひかっているのはあなた自身だと気づく。あなたは太陽だ。私には眩しい。

「ええ」

私が答えるとあなたは口の端を上げて、再び手元に視線を落とした。背中にかかった黒髪が薄山吹に菊文様の単衣をさらりと滑っていく。

あなたが手にしているのは一冊の写真帖だ。紙焼き写真が台紙に一枚ずつ貼りつけられている。台紙は金振の千代紙で彩られていて、あなたが繰るたび金のかけらがちらりとひかる。表紙には「内国博覧会」と流麗な字で書かれている。これはあなたのお父さまの文字だ。あなたのお父さまは写真を撮るのがお好きで、部屋には写真帖に加え種板をおさめた桐箱がいくつもある。中でもあなたのお気に入

りがこの内国博覧会の写真帖だ。

あなたは写真帖をそつと縁側に寝かせる。紙に焼きつけられた豪華な門に黄金色のひかりが差し込む。まるで異国の城門のようなこれが同じ町にあったなんて信じられない。見たこともない西洋風の建物、まっさらな大極殿、暗闇に浮かぶ電飾の施された巨塔。そして賑わう人、人、人。写真はその薄い体に祭の熱気をしんと閉じ込めている。

「御大典の博覧会ももう来月やなあ」

あなたは膝においた私の手のひらに、自身の手のひらを重ねる。

「私ずうつとこんな博覧会に行ってみたかったんよ。麦と一緒にこな」

あなたが微笑んで、私の心は陽光にさらされる。

「でも不思議。博覧会の頃、私も麦もこの世にはいたはらへんかったのに、今こうしてその様子を見れてるんやから。写真は星のひかりみたいやわ」

「星？」

私が首を傾げると、あなたは天を仰いで話しはじめた。「私らが今見ている星はもう空にはないんよ。私らが見て

いるのは星ではなく星のひかり。ひかりがここに届く頃には星は消えてしまってるん。先生が言うたはったえ」

「……」

あなたの通う京都府立第一高等女学校、通称府一は才女の集う名門だ。府一の象徴ともいえる古代紫の袴をお召しになって颯爽と歩くあなたに、道行く人が羨望のまなざしを差し向ける姿を私は何度も見たことがある。

あなたは物知りで、私には理解の及ばないことがよくある。今聞いた話だつてにわかには信じられなかった。だって星は毎夜、あそこに「ある」じゃないか。私が空を指さしそう述べるとあなたは言った。

「星と星から放たれたひかりは別物なんよ」

そうだろうか。私はあなたから放たれた言葉と、あなたは同じだと思っている。別なはずはないではないか。黙り込む私をよそにあなたは話を続ける。

「写真はなあ、ひかりを焼きつけるんや。焼きつけられたひかりは一瞬やけど、その一瞬の向こう側にはいろんなことがある」

あなたは桐箱から一枚の種板をそつと抜き取る。ガラスを太陽に透かしてみると、木馬に乗った一人の男の子が浮

かびあがった。それは幼くして亡くなったあなたの弟、辰彦さまだ。

「私はこの写真を見ることで、辰彦と過ごした日々を思い出す。一瞬のひかりのおかげで、一瞬のひかりの向こう側を見るんや。写真が映すのは一瞬。やけども一瞬ではないのんよ」

私はあなたの言うことが分かるようで分らない。だからいつも曖昧に頷く。それでも一緒に居たいと思うのは、眩しいあなたに照らされたいからだ。

辰彦さまが亡くなり、あなたは婿を取りこの家を継ぐことになった。御一新の後も京都に残ったこの祝園ほろの家をとはいえ女は爵位を継がないから、当主はあなたではなくあなたの婿さまになる。

公家と言っても下の下よ、とあなたはいつも笑うけれども、あなたはこの家を大切に思っている。府一を受験されたのもこの家あつてのことだ。なにかがあつたときは自分の手でこの家を支えたいと、いつかあなたは私に語った。この家の後継ぎとして、あなたは少しの迷いもなく歩みを進めている。自分の人生を自分で決めている。あなたは眩しい。

それにひきかえ私はどうだろう。

私だっけいずれ嫁に行く。そのためにここへやられたと
いってもいい。それなのに私にはあなたのような覚悟はな
い。だって私は――。

見上げるとひかりが目を刺して、手のひらで庇をつくつ
た。空には薄ぼやけた雲が空の水色を透かして曖昧に漂っ
ている。

「不思議やろう。もうおらへんのにここにいたはるみたい
で。辰彦にも麦に会うてほしかった。けどこうして麦に見
てもらえて嬉しいわ。辰彦の欠片を知ってくれているよう
で。でも、」

あなたは俯く。頬に影が射す。

「写真があらへんかったらもつと綺麗に忘れられたかもし
れへんとも思うんよ。いつまでも見えるかたちでそばにあ
るからつらくなる」

あなたは桐箱の溝に沿わせて辰彦さまの種板を仕舞い、
次の種板を抜き取る。それは私と出会う前のあなただっ
た。私の知らない、幼いあなた。私なんかとはまったく違
う、あなた。

「なんかあらはった」

あなたは私の顔を覗き込む。

「いえ」

「言いよし。麦は自分のこと一つも言いひんのやさかい」
言いよし。それもあなたの口癖だ。私はその言葉を投げ
かけられると、心をちくちく突かれた気持ちになる。なに
か、なにか言わないと、と。そうして口からこぼれた言葉
が自分の言葉なのか、あなたによってつくられた言葉なの
かがいつも私には分からない。

「……自由でいいなと思いまして」

こぼれたのは、ただ心に「ある」気持ちだった。自分の
ことを自分で決めているあなたは自由だ、という。しかし
私はあなたの顔が少し曇るのを見て後悔する。言わなけれ
ばよかったと。ただそこにあるだけの、あなたに差し出す
準備など一つもされていない、曖昧な言葉を。迷いは表
に、出さない方がいい。

「私は麦こそ自由やと思う」

あなたは私のために用意した言葉をさっと投げ返す。

「どこでも生きていけるやろ。ここやなくても」

あなたがこちらを向く気配がしてさっと目を落とす。私
は怖かった。あなたがどんな気持ちでその言葉を書いてい